

四国民放クラブ日より

あの「炎のストッパー」

藤川球児が高知に

高木 和暢(RKC)

ことは5月下旬に起きた。アメリカ・レンジャーズに在籍していた藤川球児が、自由契約選手になったと報じられたからである。

日本野球機構はもとより、スポーツ紙も野球ファンも、一斉にその去就に注目した。



ユニフォーム姿で会見する藤川球児
高知ファイティングドッグス

2年前、彼は「靱帯再建手術」を受けていた。長いリハビリ期間に、将来についていろいろな思いが頭の中を駆けめぐったという。ともあれ今期、レンジャーズと一年契約を交わしたが、オープン戦終盤に、左脚付け根の張りで故障者リストに入り、開幕後2試合に出ただけで戦力外となっていたのだ。

1988年ドラフト一位で阪神

に入団する。在籍13年。ゲーム終盤、救援に出た藤川の直球勝負は阪神ファンを釘づけにし、そして

『六甲おろし』の大合唱を幾度浴びせられたことか。2003年(星野時代)2005年(岡田時代)のセ・リーグ優勝にも大きく貢献。

2006年には、35試合連続無失点の日本記録を更新している。「そんな彼だ。戻るのはきつと阪神」。その大方の予測が驚きに変わった。

6月2日、四国のプロ育成球団「高知ファイティングドッグス」が、藤川との入団契約を発表する。本人もブログでコメントを出した。「僕と妻の生まれた故郷高知、未来のスターとなる子ども達に、僕の投げる姿を見て、今後の夢に繋がってもらいたい。僕を応援してくれた人達、そして育ててくれたその高知から野球人生を再スタートすることにしたら」と、大手術の後のリハビリ中に考えついた一つの結論だったかも知れない。

藤川球児の契約内容は「背番号11」「無報酬」「登板試合での入場料収入の10パーセントを児童養護

施設に寄付する」となっていた。なんと潔いことか。私は何十年

の彼のコメントには胸が熱くなった。

ただ、この当初の契約については、高知ファイティングドッグスの上期(6・7月)を期限にしており、後期(8・9月)については決めていなかった。球団側も「いつまでもここにいる選手ではない」としながらも、後期残留に期待を繋げていた。

その後彼は、高知に帰った家族達と故郷の自然を楽しみながらマイペースで調整を続ける。

6月13日、高知市西方の片田舎、人口6055人の越知町の町民総合運動場(ドッグスのホーム球場)に選手全員が揃い練習開始。藤川は打撃投手として、帰国後初のマウンドに立つ。入団公表後、在阪のTV局やスポーツ紙、プロのスカウト等大勢が見守る中、ドッグスの選手9人に対し33球を投げる。球はバラツキつつも本人は「特に不安定さはない」と状況について説明した。記者たちの見方も同様で「フォームは変わらず」「まだ調整段階」との評価だった。

20日のオープン戦では、カーブ、フォークなどを交えながら最速147キロを出していた。

8月4日、ドッグスから、藤川との後期の契約発表があった。球団もファンもひとまず胸をなでおろす。

8月6日高知球場、いよいよ初の公式戦登板である。関西方面から駆けつけたファンもあり、多くの観衆が見守る中「徳島インディゴソックス」を相手に藤川が投球開始。1球目、2球目共にストライク。3、4球はファウルに。5球目、目先を変えるべくインコースをついた見せ球がバッターのヘルメットに当たる。

「危険球退場!!」なんと登板わずか5球での退場に観客は「ギャーッ」「ええどうして」「もう一回出直してーっ」など大ブーイング。藤川のほろ苦デビューとなる。

翌7日は愛媛のチームと対戦。途中三番手投手として登板、「5イニング12奪三振さすが藤川」という内容で、前回の失態を帳消しにした。

今年の四国アイランドリーグは、藤川球児が台風の目になりそうである。

ある。

ある。